紹介

戰時下一九四〇年獨逸の人口動態

Eheschliesszungen, Geburten und Sterbefälle im Jahre 1940, Wirtschaft und Statistik Nr. 7. 1941

戰爭が交戰諸國の人口現象に及ぼす深刻な影響については、或は大量の出産停止、或は銃後死亡率の著增等、いまさら說くまでもないことであり、支那事變下の我が國人口現象の中にもその影響するところの深刻さを痛感せしめて遺憾ないが、一昨三九年九月に初まる今次歐洲動亂下の獨逸が完全に戰時下にあつた昨一九四〇年度に示した人口動態の諸數字は極めて刮目讃嘆に値ひするもので、ナチス登場以降に辿つてきた獨逸人口現象好轉の步調を中斷せしめることなく戰爭の慘禍を恐らく可能なる範圍の最小限に喰ひ止めてをり、戰ふ獨逸の陰れたる底力を遺憾なく物語つてゐる。以下獨逸統計局機關誌々上公表の數字によりその概要を紹介することとする。

一　婚姻について

國民生活意慾の最も直接且つ端的な表現である婚姻數を見ると前三九年九月に初まる大量の所謂「戰時結婚」の後を受けて昨四〇年度は總數に於ても千分率に於ても對前年比に著減の跡を見せてゐること次表に見るが如くであるが、婚姻適齡人口といふものに一定の限度がある以上これは當然のことで、最近の平時年度である一九三八年と比べてみると婚姻總數の減少は全國で僅かに三八、八二五人、五・〇%に過ぎず、三七年と較べると同じく全國で却つて二九、〇九八人、四・一%の增加の跡をみせてをり、この事實だけからでも昨四〇年度の婚姻事情は極めて滿足すべきものであつたことを物語つてゐる。

一九三八―四〇年の婚姻統計(1)

	舊領域內		オストマルク(2)		ズデーテン獨逸地方		全國(3)	
	總數	人口千に付	總數	人口千に付	總數	人口千に付	總數	人口千に付
一九三八年								
第一四半年季	一二五、〇一九	六・七	二一、一〇三	六・八	六、〇四二	七・一	一三三、〇三四	六・八
第二〃	一八九、〇三六	一一・〇	一九、六三六	一一・九	七、八二四	九・一	二一七、七五三	一一・〇
第三〃	一五五、二九二	九・〇	一三、一三八	一三・二	七、三七三	八・五	一八五、九三四	九・三
第四〃	一八五、七一五	一〇・八	三七、一三八	三三・三	九、一四一	一〇・五	二三三、五一五	一一・七
計	六四五、〇六二	九・四	八九、九九四	一三・六	三〇、三七九	八・八	七七〇、三三五	九・七
一九三九年								
第一四半年季	一三三、七三五	七・二	三〇、七三〇	一八・七	九、八五八	一二・七	一六四、〇六一	八・三
第二〃	一九〇、五〇一	一一・〇	二八、四九〇	一七・二	一三、三〇九	一四・五	二三二、六三六	一一・七
第三〃	一八八、七六七	一〇・八	二六、五八九	一五・九	一三、七五九	一四・九	二二九、四四二	一一・四
第四〃	二七〇、〇九八	一五・五	三二、七三一	一八・九	一四、六〇八	一七・〇	三一八、二〇三	一五・八
計	七七三、〇九一	一一・一	一一七、五三〇	一七・七	四九、五三四	一四・五	九四四、三三一	一二・八

一九四〇年								
第一四半年季	二〇〇、〇七三	一一・五	三六、八六四	二〇・一	三、四九〇	一四・五	二四〇、六三〇	一三・〇
第二〃	一四六、七六三	八・四	二〇、八三三	一三・五	八、八〇〇	一〇・二	一七七、三九八	八・八
第三〃	一二六、〇二四	六・六	一五、〇二二	八・九	六、三二五	七・三	一三八、四一八	六・八
第四〃	一五〇、〇八七	八・五	一五、七九二	九・三	七、六九六	八・九	一七四、八二四	八・六
計	六二三、九四六	八・八	七八、四九〇	一二・七	三五、三〇一	一〇・二	七三一、四〇〇	九・一

(1)本表數字は爾後報告による一部訂正數字なり。(2)現行行政區劃によるオストマルク縣にして、ズデーテン獨逸地方所屬部分を除く。(3)舊波蘭領域と及びオイペン・マルメヂを除く。

が更に精確な評價方法として獨逸統計局は年齡構成の健全で且つ經濟的にも好況期にあつた一九一〇—一一年の婚姻關係を基準とし、特に三三年以降ナチスの指導下にあつた舊領域内に於て、右婚姻率が各年次の年齡及び配偶事情に應じ夫々期待せしむる所の數字を求め之を其の實數と比較對照してゐるが、その結果は次の如くで、昨四〇年も亦好條件下にあつた一九一〇—一一年の水準を遙かに拔いてゐることを物語つてゐる。

	期待數	實數
一九三八年	約　六〇〇、〇〇〇	約　六四五、〇〇〇
一九三九年	〃　五七〇、〇〇〇	〃　七七二、〇〇〇
一九四〇年	〃　五三三、〇〇〇	〃　六一三、〇〇〇

尤も昨四〇年度の婚姻を四半年季別に見ると第二四半年季以降の落勢は特に顯著だが、婚姻適齡人口の著減を思へば寧ろ當然のことで、先立つ婚姻著增に伴ふ獨身男子數の著減の跡を計量してみると婚姻成績は決して惡化したとはいへない。卽ち獨逸統計局の計算によると一九三九年の國勢調査時(五月十七日)に於て一九〇〇乃至一九一九年生れ(卽ち昨四〇年に二十歲以上四十歲未滿)の男子中の既婚者(舊領域内)は一九一〇—一一年の婚姻關係より期待される程度を超えること既に約七萬八千人、更に五月以降三九年末迄の初婚男子數約五〇四、〇〇〇人は同じく右期待水準(三三九、〇〇〇人)を越ゆること約十六萬五千人で、その大部分は一九〇〇乃至一九一九年生れの者と見てよい。そこで右合計の二十四萬三千といふ數字が三九年末に於ける一九〇〇乃至一九一九年生れ男子中の超過既婚者數を示すわけで、之に昨四〇年の第一四半年季に於ける超過新婚男子(九九、〇〇〇人)中の初婚者八萬六千人を加へると昨四〇年の四月には三十三萬人近くの二十歲乃至四十歲男子が既に期待水準を超過して既婚者となつて了つてゐたわけで、この數字は婚姻頻度の著減を强制するに充分だといつてよい。それに前三九年末の所謂「戰時結婚」は多く時期を早めた先越し結婚であつたことを思ふといよいよ四〇年度の婚姻著減を豫期せしめざるを得ないわけだが、而かも昨四〇年の四月以降に於ける二十歲乃至四十歲男子の新婚者數(推定三五七、〇〇〇人)は右期待數に足らざること僅かに一萬六千人、四・五%に過ぎない。いひ換へれば昨四〇年第二四半年季以降に於ても婚姻適齡人口激減の最惡條件の中で初婚男子の婚姻は極端な惡化を見せなかつたわけで、更に死離別男子の再婚を併せた昨四〇年度全年の婚姻總數が一九一〇—一一年基準の期待數を超えてゐることは前述の如くである。なほ以上の期待數と實數との比較對照を人口千に對する千分率に於いて四半年季別に示せば次の如くで、第二四半年季以降に見る期待率不足も夫々〇・二、〇・七、〇・二といふ極めて僅かの數値に過ぎない。

(人口千に付舊領域内)

	一九三九年		一九四〇年	
	實婚姻率	期待率	實婚姻率	期待率
第一四半年季	七・二	六・二	一一・五	五・九
第二四半年季	一一・〇	九・二	八・四	八・六

第三四半年季	一〇・八	七・八	六・六	七・三
第四四半年季	一五・五	九・四	八・五	八・七
年平均	**一一・一**	**八・二**	**八・八**	**七・六**

昨四〇年戰時下婚姻關係が極めて順調であつたことを更に明瞭ならしむるものは前世界大戰時との比較で、嘗ての第一次大戰時に於ては平常年度たる一九一三年のさなきだに低い婚姻率が戰爭開始年度、及び完全戰時年度へといよ〳〵低下をみせてゐるのに較べ今次大戰下の對應年次の婚姻率は次の如くで、兩大戰下に於ける國民的生活意慾の相違は一目瞭然たるものがある。

前大戰時		今次大戰(舊領域內)	
一九一三年	七・七	一九三八年	九・四
一九一四年	六・八	一九三九年	一一・一
一九一五年	四・一	一九四〇年	八・八

二　出生について

更に人口動態中の最大關心事たる銃後の出産力についてみるに、その數字は大量壯丁の動員下にある戰時に於て期待し得べき恐らく最大限の好成績を示してゐるといつてよい。其の明細數字は次の如くであるが、

一九三八―四〇年の出生統計(1)

	舊領域內 總數	人口千に付	オストマルク(2) 總數	人口千に付	ズデーテン獨逸地方 總數	人口千に付	全國(3) 總數	人口千に付
一九三八年								
第一四半年季	三四二、三〇四	一九・八	三二、二〇八	一四・二	三、八四一	一六・三	三八二、四三四	一九・五
第二 〃	三四三、三七八	一九・九	三三、〇二八	一三・九	一四、三二三	一六・七	三八三、七四三	一九・四
第三 〃	三三〇、二六四	一九・二	三一、一四六	一三・二	一三、四八四	一五・六	三六九、〇〇八	一八・四
第四 〃	三三二、五八八	一九・五	二五、四三〇	一五・二	二一、二〇四	一四・一	三七三、二四二	一八・七
計	**一、三四八、五三四**	**一九・六**	**九三、八二三**	**一四・一**	**五二、八五二**	**一五・七**	**一、五〇八、四一七**	**一九・〇**
一九三九年								
第一四半年季	三五六、六七一	二〇・九	三二、四一六	一九・八	一三、八八八	一六・五	四〇五、九七八	二〇・六
第二 〃	三六一、八六三	二一・九	三三、三三三	二〇・一	一五、九六五	一八・八	四一四、一四五	二〇・八
第三 〃	三五一、二五八	二〇・一	三五、四六六	二一・二	二三、九九四	二七・九	四一三、八一四	二〇・五
第四 〃	三三七、七〇七	一九・三	三七、六六一	二二・四	二一、〇三五	二四・五	三九九、三三三	一九・八
計	**一、四〇七、四九九**	**二〇・三**	**一三八、八七六**	**二〇・九**	**七四、八八二**	**二三・〇**	**一、六三三、二四九**	**二〇・四**
一九四〇年								
第一四半年季	三九〇、七一四	二二・四	四一、三三二	二四・七	二三、〇〇九	二六・八	四五八、八二六	二二・八
第二 〃	三五一、三三〇	二〇・一	三六、六五〇	二一・九	二一、三三八	二四・八	四二三、九二一	二〇・五
第三 〃	三四一、五三四	一九・四	三五、四四三	二一・〇	二〇、一三七	二三・二	四〇〇、六二九	一九・七
第四 〃	三一八、四六二	一八・一	三二、七二三	一九・四	一八、一六三	二〇・九	三七二、三八六	一八・三
前	**一、四〇二、〇四〇**	**二〇・〇**	**一四六、一四八**	**二一・八**	**八二、六四七**	**二四・〇**	**一、六五五、七六二**	**二〇・四**

(1)(2)(3)前表に同じ。

大量戰時結婚に表現せられた獨逸國民の逞しい生活意慾は昨四〇年第一四半年季に於ける出生の著增とさへなつて表はれてゐる。右第一四半年季に於ける對前年同季の出生增は全國で五二、八四八人、昨四〇年の閏日の出生數を差引いても純出生增は四七、六一八人、一一・七％增といふ盛況である。四月には猶ほ對前年同月增一一％といふ增勢を持續したが、五月に於いて增勢は一・八％と弱まり、六月に入つて初めて對前年同月比に出生の著減を見せるに至つた。とはいへ之を前世界大戰時の經驗と比較すると右戰時出生停止もその程度は比較的輕度で、嘗て一九一五年五月即ち開戰後九箇月の後に於ける對前年同月の出生減三〇・二％と對比して昨四〇年六

月に於ける對前年同月出生減の割合は一四・九%に過ぎない。のみならず翌七月以降に於いては、對波蘭戰線後の大量賜暇や大量戰時結婚の影響などにより、再び回復步調を示してをり、右對前年同月の出生減は七月に八・〇%、八月には四・九%と低下の跡を見せてゐる。その月出生率は次の如く前々三八年同月の各出生率を超えるに至り、九月に到つては更に前三九年同月の高出生率をさへ凌ぐといふ狀態である。

出生率(全國)

	人口千に付		
一九四〇年四月	二三・四		
〃　六月	一七・二		
〃　七月	一八・九	一九三八年は	一八・五
〃　八月	一九・〇	〃	一八・〇
〃　九月	二一・二	一九三九年は	二〇・七

九月以降の第四四半年季に於ける對前年同季出生比は再び六・七%の減となつたが、昨四〇年通計の全國出生總數は百六十五萬に近く、閏日の出生數を差引いても對前年の出生增六、二七三人といふ結果になつてゐる。

獨逸統計局は獨逸將來人口の當面不可缺の所要量として二十歲男子の數を嘗て右年齡級男子人口の極めて豐富であつた一九一〇年當時の水準に持續することを目標としてゐるが、この目標を充足する爲に必要な要出生數は一、六五二、〇〇〇人で、この出生數を昨四〇年に於ける全國總人口八〇、六四一、〇〇〇人に當て嵌めてみると人口千に付二〇・五の出生率を必要とすることになる。昨四〇年に於ける實際の出生率は上揭の如く二〇・四で僅かに〇・四%の不足、同趣旨の計算による前三九年の出生不足一・二%を更に一段と壓縮したわけで、完全に戰時下にあつた昨四〇年度に於ける獨逸國民の逞しい出產力を確證して遺憾ないといへよう。尤もこの好結果にはオストマルク及びズデーテン獨逸地方等獨逸新領域の寄與するところ甚大で、舊領域内の出生率二〇・〇は所要出生率に對する不足を前三九年の一・八%から二・四%に增大してゐるのに對し、オストマルク及びズデーテン地方の出生率は右二〇・五の要出生率を夫々一・三及び三・五だけ超過してゐる。メーメル地方及び舊ダンチヒ自由市についても事情は同樣だが、しかしこの方は領域が小さいだけ全體への影響はさして大きくない。

要之、昨四〇年度に於ける獨逸人口動態數字の物語るところは寔に驚異に値ひするものといつてよいが、とはいへこの事實は決して今次大戰の及ぼせる民族生物學的損害を否定するわけではない。といふのは若し昨四〇年の第一四半年季に猶ほ見られた樣な出生の增加がその後も引き續いて持續したと考へるならば昨四〇年に於ける出生數は前三九年より更に少くとも一〇%高い水準に達したであらうと推定されるからであつて、その場合は獨逸全國で約百八十萬の出生數を得た筈になる。いひかへれば昨四〇年の實際の出生數は右の數字に對して十五萬人の不足を示してゐるわけで、之が昨四〇年末までに今次動亂を原因とするところの出產停止の數と推定してよいわけである。とはこの推定出產停止數も之を嘗ての第一次大戰時と比較すると格段の相違で、一九一五年の出生數(一、三八二、〇〇〇)は前一九一四年(一、八一八、〇〇〇)に較べて實に四十三萬六千の著減を示してゐた。惟ふに前大戰は獨逸國民の出產力減退途上に勃發したもので其の影響は直接に國民の生物學的危機を齎さゞるを得なかつたわけであるが、今次動亂は獨逸國民の民族生物學的恢癒の途上に發生したもので、それだけこの已むを得ない多少の戰禍も恐らく戰後には可及的迅速に快癒されるに相違ないと獨逸統計局は樂觀してゐる。

三　死亡について

昨四〇年の死亡率は特に年初頭一月乃至四月の間斷なき酷寒の持續の爲に前三九年よりも稍々高くなつた。その詳細は次表の如くで、

一九三八—四〇年の死亡統計 (1)

	舊領域內		オストマルク(2)		ズデーテン獨逸地方		全國(3)	
	總數	人口千に付	總數	人口千に付	總數	人口千に付	總數	人口千に付
一九三八年								
第一四半年季	二〇八、三七六	一三・一	二五、五九七	一五・七	一三、一四二	一五・五	二四八、七九五	一三・七
第二〃	二〇七、四一三	一三・〇	二四、九八一	一五・一	一三、四三〇	一四・五	二四六、五三六	一三・五
第三〃	一八二、四一五	一〇・六	二〇、二四三	一二・一	一〇、九七九	一二・七	二二五、一二四	一〇・八
第四〃	二〇一、〇二六	一一・八	二三、九三四	一四・三	一三、一八一	一四・〇	二三八、八三九	一一・九
計	七九九、二三〇	一一・六	九四、七五五	一四・三	四八、七三二	一四・二	九四九、二八四	一二・〇
一九三九年								
第一四半年季	二四六、九一九	一四・四	三一、五一一	一九・二	一三、九一七	一六・六	二九四、三六〇	一四・九
第二〃	二一四、四二三	一二・四	二四、三三四	一四・七	一一、三八二	一三・四	二五一、八七一	一二・六
第三〃	一八〇、八八九	一〇・四	二〇、六一九	一二・三	一〇、一六〇	一一・八	二二三、二〇五	一〇・六
第四〃	二一一、〇〇四	一二・一	二五、一七二	一五・〇	一一、八五〇	一三・八	二四九、八二三	一二・四
計	八五三、二三五	一二・三	一〇一、六四六	一五・三	四七、三〇九	一三・九	一、〇〇九、二五八	一二・六
一九四〇年								
第一四半年季	二七四、五三三	一五・七	三一、七二三	一九・〇	一五、〇一七	一七・五	三二一、四六三	一六・一
第二〃	二三〇、三一八	一三・二	二五、四六五	一五・二	一二、五八五	一四・六	二七〇、三八〇	一三・四
第三〃	一八一、七二四	一〇・三	二〇、二七八	一二・〇	一〇、一三九	一一・七	二一三、七〇一	一〇・五
第四〃	二〇二、一六一	一一・五	二三、九四一	一三・六	一一、四四三	一三・二	二三八、一六五	一一・七
計	八八八、七三六	一二・七	一〇〇、四〇六	一五・〇	四九、一八四	一四・三	一、〇四五、七〇八	一三・〇

（備考）本表の死亡には死産を除く。又、一九三九年九月一日以降の戰死將兵を除く。(1)(2)(3)は前揭表に同じ。

前三九年に對する死亡增は全國で三六、四五〇人であるが、第一四半年季だけの對前年同季增は二九、一〇二人に及んでゐる。が嘗て同樣な酷寒を經驗した一九二八—二九年の冬にも死亡率は異常に上昇して二九年の第一四半年季には死亡率は一七・〇に及んだが、昨四〇年度の同季死亡率は當時と較べて人口年齢構成の不利なるにも拘らず之より〇・九だけ低い。昨四〇年の酷寒は四月までも續き、五、六月に入つて初めて認められた死亡率の著減も四月の死亡增を相殺するに到らなかつたが、昨四〇年の後半年に於ては死亡は前年同季よりも低下してゐること前表に見るが如くである。

昨四〇年の死亡增についてはその外高齢人口層の不斷の增加をも無視できない。酷寒の影響が特にこの種高齢で且つ重症病の者たちの死亡增として表はれたことは次の人口一萬五千以上獨逸諸都市の主要死因別統計にも見られる如くで、老衰、心臓病、腦卒中及び癌による死亡增は對前年死亡增の六〇%以上を占めてゐる。

人口一萬以上獨逸諸都市(1)の主要死因（一九四〇年）

	總數(2)		人口一萬に付	
	一九四〇年	一九三九年	一九四〇年	一九三九年
チフス	二三八	一九〇	〇・〇七	〇・〇六
痲疹	五七〇	五六五	〇・二	〇・二
猩紅熱	八四七	七一八	〇・二	〇・二
百日咳	一、三一三	八一二	〇・四	〇・二
ヂフテリア	三、八〇九	三、六一八	一・一	一・一
流行性感冒	四、六一二	六、五一二	一・三	一・九
結核	二三、六三九	二一、三七九	六・八	六・二
癌及惡性腫瘍	五五、三四三	五四、七九八	一五・九	一六・〇

糖尿病	七、一六〇	七、四四五	二・一	二・二
腦卒中及痲痺	三五、四四二	三四、三七三	一〇・二	一〇・〇
心臟病	六八、一〇五	六五、〇八二	一九・六	一九・〇
氣管支炎	五、六一二	五、二五九	一・六	一・五
肺炎	三一、一二四	三一、五七〇	九・〇	九・二
盲腸炎	一、七五一	二、二三二	〇・五	〇・六
腎臟炎	五、七一四	六、〇一五	一・六	一・八
産褥熱その他妊娠及産褥中の不慮の傷害	二、一二五	二、〇五〇	三・四(3)	三・三(3)
老衰	三三、二三三	二九、二五二	九・六	八・六
自殺	八、三八〇	一〇、三八九	二・四	三・〇
他殺	三〇三	三四一	〇・〇九	〇・一
不慮の傷害	一四、二六五	一二、八四七	四・一	三・八

一歳未滿兒の特殊死因

早産	八、一〇七	八、〇六五	一三・一(4)	一三・四(4)
先天性畸型弱質及び分娩による産兒の障害	一〇、五〇八	一〇、一五四	一七・〇(4)	一六・九(4)
腸カタル	四、一二一	三、四六二	六・七(4)	五・七(4)
黴毒	一一五	一二一	〇・二(4)	〇・二(4)

(1)舊領域內及びオストマルクの諸都市、但しザール地方、プリマーゼンス及びツヴアイブリユッケンの分を除く。(2)定住人口中の死亡數なり。また戰死將兵を除く。(3)出生及び死産千に付。(4)出生千に付。

右都市死亡統計に於ける對前年死亡增の總數は約一萬四千、その內八千二百は第一四半年季の死亡者で、死亡增の原因が戰爭と直接關係のない寒さの爲であつたことを物語つてゐる。結核の死亡增も亦この寒さの爲であるといへよう。盲腸炎、肺炎、腎臟炎及び糖尿病の死亡減は戰時中にも拘らず醫療保護が等閑に附されなかつたことを示すといへよう。

最後に昨四〇年の乳兒死亡率を見ると、寒さの影響は茲でも看取せられる。昨四〇年の獨逸全國に於ける乳兒死亡の對前年增は約七千三百であるが、その內凡そ三千五百は出産の增加により殘りの約三千八百は主として年首四箇月間に於ける乳兒死亡率の實際の增加と見てよいことになる。之を表示すれば次の如くである。

	舊領域內 一九三七年	舊領域內 一九三八年	舊領域內 一九三九年	舊領域內 一九四〇年	全國 一九三九年	全國 一九四〇年
第一四半年季	七・九	六・七	六・八	**七・四**	七・一	**七・五**
第二四半年季	六・五	六・七	六・一	**六・五**	六・三	**六・七**
第三四半年季	五・五	五・八	五・五	**五・六**	五・六	**五・六**
第四四半年季	五・七	五・八	五・九	**五・九**	五・八	**六・〇**
年平均	六・四	六・〇	六・〇	**六・三**	六・二	**六・五**

（本多龍雄）

ナチス治下獨逸出生增の分析

（埋め草）

	公出生總數	基本數*	差引增加	內、婚姻增加に依るもの	姙孕率向上によるもの
一九三三年	八九二、八〇〇	八七三、八〇〇	一九、〇〇〇	一九、〇〇〇	—
一九三四年	一、一三五、五〇〇	八六七、九〇〇	二六七、六〇〇	七四、七〇〇	一九二、九〇〇
一九三五年	一、一九五、三〇〇	八六二、四〇〇	三三二、九〇〇	一三〇、五〇〇	二〇二、四〇〇
一九三六年	一、二三〇、〇〇〇	八五七、七〇〇	三七二、三〇〇	一二七、七〇〇	二四四、六〇〇
一九三七年	一、二〇七、五〇〇	八五五、三〇〇	三五二、二〇〇	一三一、三〇〇	二二〇、九〇〇
一九三八年	一、二七七、二〇〇	八四九、九〇〇	四二七、三〇〇	一四二、四〇〇	二八四、九〇〇

＊基本數とは婚姻數が一九三二年と同じく、姙孕率が一九三三年と同じと假定せる場合に豫期せらるべき公出生總數を謂ふ。

（Wirtschaft u. Statistik Nr. 7. 1939より）